

2016 第九回

日台原住民族研究フォーラム

台日原住民族 研究論壇

聚焦新原民政策

新たな原住民族政策に注目

9th Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies:
Focusing on New Aboriginal Policy

文 | 蔡佳凌 (政治大學原住民族研究中心秘書)

圖 | 政治大學原住民族研究中心

譯 | 石村明子 (專職中日文翻譯)



2016年8月22日，「台日原住民族研究論壇」於政治大學迎來第九次的舉行，今年續邀請「日本順益台灣原住民研究會」研究群來台，台日雙方針對近一年台灣原住民族研究現況切磋對話。今年適逢新政府團隊上任，原住民族政策的轉變受到國際學者關注，因此本次論壇，除台日原民現況研究之外，更聚焦原民政策探討。

原民新政策：

「和解」、原鄉都會並重

開幕式，原住民族委員會夷將·拔路兒主委重申原住民族歷史正義與轉型正義政策的重要性，認為原住民族的歷史研究中，日本時代文獻研究相當重要，台日論壇聚集雙方學者一同交流有其必要。台北市政府原住民族事務委員會陳秀惠主委則認為，台灣原住民族轉型正義從台北市介壽路重新命名為凱達格蘭大道開始，勉勵研究者秉持以原住民族歷史創建友善原民社會的信念。

開幕式主持人與致詞貴賓（左起，政治大學林修澈名譽教授、日本橫濱國立大學笠原政治名譽教授、原住民族委員會夷將·拔路兒主任委員、台北市政府原住民族事務委員會陳秀惠主任委員）。

開幕式座長與挨拶をいただいた来賓（左から順に、政治大学・林修澈名譽教授、横浜国立大学・笠原政治名譽教授、原住民族委員会・イチャン・パルー主任委員、台北市政府原住民族事務委員会・陳秀惠主任委員）。

第9回「日台原住民族研究フォーラム」が

2016年8月22日、政治大学で行われた。今年も台湾で「日本順益台湾原住民研究会」の研究者グループを迎え、この1年の台湾原住民族研究の日台双方の現状について討議した。今年はちょうど政権交代があり国外の研究者からも原住民族政策が注目を浴び、今回のフォーラムでも日台の原住民族研究の現状のほか、とりわけ原住民族政策に焦点が当てられた。

新たな原住民族政策：

「和解」／原住地と都市の双方が重要

開幕式では、原住民族委員会のイチャン・パルー



專題報告：原住民族政策與學術的對話（左起，原民會伊萬·納威副主委、主持人日本橫濱國立大學笠原政治名譽教授、原民會鍾興華副主委）。

基調報告：原住民族政策と学術との対話（左から順に、原住民族委員会・イワン・ナウイ副主任委員、座長の横浜国立大学・笠原政治名譽教授、原住民族委員会・鍾興華副主任委員）。

專題報告「原住民族政策與學術的對話」由原民會兩位副主委，以學術角度解析新政府的原住民族政策。鍾興華副主委介紹新政府原民政策九大具體主張，主張應以原住民族史觀詮釋歷史為事實基礎，以原住民族基本法為藍圖，落實民族權利，才能達到真正的「和解」；伊萬·納威副主委則就經濟發展與公共建設業務，點出原住民族人口近半數移入都市，未來原民政策勢必趨向原鄉、都會區雙軌進行，雙方資源不應互相排擠。

第一場次論文發表「都市原住民族政策」延續原民政策專題，大葉大學原住民族學生資源中心尤天鳴執行長，探究都市原住民族政策研究之歷程與轉變，認為未來研究應重新建構以都市原住民為主題的研究視野，才能完善都原政策的整體論述；台北市原民會教育文化組陳誼誠組長，回顧及剖析台北市20年以來的族語振興政策執行成效，



論文發表III：日本—台灣原住民族研究動向（左起，福岡大學宮岡真央子准教授、國立民族學博物館野林厚志教授、主持人國立台灣史前文化博物館林志興副館長、日本大學清水純教授）。

論文發表III：日本—台灣原住民族研究的動向（左から順に、福岡大学・宮岡真央子准教授、国立民族学博物館・野林厚志教授、座長の国立台湾史前文化博物館・林志興副館長、日本大学・清水純教授）。

一主任委員が原住民族の歴史的正義と移行期正義政策について改めて言及し、原住民族の歴史研究における日本統治時代の文献や研究の重要性と、日台の研究者が一堂に会するフォーラムの必要性について述べた。続いて、台北市政府原住民族事務委員会の陳秀恵主任委員が、台湾原住民の移行期正義が始まったのは台北市の介寿路が名称変更によりケタガラン大道となった時点であり、研究者には原住民族社会を思いやって原住民族史を構築する信念を持ってほしいと述べた。

基調報告「原住民族政策と学術との対話」では、原住民族委員会副主任委員2名が、学術的な視点による新政権の原住民族政策の考察を述べた。鍾興華副主任委員は新政権による9つの具体的な原住民族政策について紹介し、原住民族の歴史観により解釈された歴史的事実や原住民基本法にもとづいて民族の権利を定着させることにより、本当の「和解」に至ることができると述べた。また、イワン・ナウイ副主任委員は経済発展と公共

其認為雖已多方嘗試創新施政，但族語復興的關鍵，仍取決於教學者、學習者及家長的態度。

台日原民研究：

古文獻新發現、原民發展現況

新書介紹場次，邀請南天書局魏德文發行人，對於歷時三年完成，預計於今年出版之《台灣原住民族歷史地圖集》進行內容與編纂歷程的介紹，全書收錄自荷西、清領、日治時期400多年之219幅原始尺寸復刻地圖，將成為原民研究重要的史料工具書。

第二、三場次論文發表，聚焦於今年台日雙方最新的研究成果。東華大學中國語文學系陳文之博士，其博士論文全面整理比較分析《生蕃傳說集》、《原語台灣高山族傳說集》兩書內容，並嘗試與後世採錄之口傳敘事故事比對，探討台灣原住民族口傳敘事歷時性的演變現象。政治大學民族學系簡史朗博士，博論根據考古資料、語言證據等相關資料，推翻舊有分類，辯證「貓霧揀社」應屬拍瀑拉族（Papora），不屬巴布薩（Babuza）族，為未來平埔研究開啟全新視野。

日本大學清水純教授自荷蘭文獻中，梳理17、18世紀立霧溪周邊民族關係與遷徙歷史，認為未來可從考古或其他領域研究成果進一步對照驗證；日本民族學博物館野林厚志教授，介紹該館與順益博物館合辦的每2年學生海報競賽之作品企劃展，從海報設計作品中，探討現今台灣社會如何建構原住民族印象；福岡大學宮岡真央子准教授，則觀察台灣原住民族近年來正名現象與ethnicity產生條件，認為原住民的ethnicity受分裂、統合雙向力學影響，須以多元性、多層性的角度理解。

インフラ事業の視点から、原住民族の全人口の約半数が都市に移り住んでいるため、将来的には原住民族居住地と都市の両方で政策を進めるべきであり、両者は資源の取り合いを避けるべきだと述べた。

第1セッションの「都市原住民族政策」では原住民族政策についてさらなる議論がなされた。大葉大学原住民族学生リソースセンター尤天鳴執行長は、都市原住民族政策の研究の歩みと変遷について、都市原住民族政策を十分に論述するには都市原住民をテーマとした研究視野を構築するべきだと述べた。また、台北市政府原住民族事務委員会文化組の陳誼誠組長は、台北市における20年来の民族言語復興政策の実施と効果を分析し、様々な新政策が行われてきたが、民族言語復興の鍵は教育者や学習者、保護者の姿勢にあると述べた。

日台の原住民族研究：

古い文献と新たな発見／原住民族発展の現状

新書紹介のセッションでは、南天書局の発行者である魏德文氏により、今年度出版予定の『台湾原住民族歴史地図集』の3年にわたる編集過程が紹介された。この地図集は、オランダ、スペイン、清、日本による400年以上にわたる統治の間に作成された219の地図の原寸復刻版で、原住民族研究の重要な史料集となると思われる。

第2、第3セッションの論文発表では日台の最新の研究成果に焦点があてられた。東華大学中国語文学科博士の陳文之氏は、博士論文で『生蕃伝説集』と『原語による台湾高砂族伝説集』の内容を全面的に整理分析し、さらにその後採集された口承伝説と比較し、台湾原住民族の口承伝説の通時的な変遷を論じた。また、政治大学民族学科博士の簡史朗氏は、博士論文で古い資料や言語に基づく資料から、以前はバブザ（Babuza）族とみなされていた「猫霧揀社」が実はパポラ（Papora）



第九屆台日原住民族研究論壇與會貴賓大合照。
第9回日台原住民族研究フォーラム参加者記念集合写真。



笠原政治教授接受原民台採訪，肯定新政府原民政策範疇廣泛，希望能將台灣經驗帶回日本分享，吸引未來更多日本年輕學者參與論壇。

原住民族テレビ局の取材を受ける笠原政治教授。新政権の原住民族政策が広い範囲にわたっていることを評価し、台湾での経験を日本でも分かち合い、将来はより多くの日本の若い研究者もフォーラムに参加してほしいと述べた。

圓滿落幕 邁向第10年

歷年與會的台日學者踴躍參加，本次論壇成果依舊豐碩，目前統計九年來發表論文已多達137篇，台日論壇已被學者們譽為台灣原住民族研究一年一度的盛會，明年將邁入第十年，是具有指標性的年度，台日雙方皆期許能在交流多年的基礎上激盪新想法，原民研究發展情形應可在台日論壇十年成果中更具體呈現。◆

族であったことを論証し、今後の平埔族研究に新たな視点をもたらした。

日本大学の清水純教授はオランダ文献にもとづき17、18世紀のタツキリ溪周辺の民族関係と移動史を整理し、今後は考古学などの研究などによってそれが論証されていくであろうと述べた。国立民族学博物館の野林厚志教授は、順益博物館と共同で民博に展示されている順益主催の隔年学生ポスターコンテストの作品デザインから、現在の台湾社会がどのように台湾原住民族のイメージを構築しているかを考察した。福岡大学の宮岡真央子准教授は、近年の台湾原住民族の正名の動きとエスニシティの生成において、そのエスニシティの分裂や統合が双方向で影響しあっており、多元性・多層性をもつものとして理解される必要があると述べた。

圓滿な閉幕と10年目への歩み

実り多いものとなった今回のフォーラムをはじめ、これまでに日台双方の研究者が参加し、9回にわたり発表された論文は137本に達した。台湾原住民族研究において、フォーラムは日台の原住民族研究者にとって年に1度の祭典となり、来年はいよいよ節目の10年目に突入する。長年の交流をもとに日台の双方が新たな発想をぶつけ合い、フォーラムでの10年間の成果において、原住民族研究はさらなる発展を遂げるであろう。◆